

まんだら通信

第 257 号 (通巻 291 号)

平成 30 年 02 月 西暦 2018 年 佛暦 2561 年 皇紀 2678 年

安房国八十八ヶ所 第一番札所

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084

真言宗智山派 天神山 紫雲寺 鈴木 龍芳

郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺

TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040

<http://www.shiunji.org/>

Mail post@shiunji.org

当山住職高橋龍彦、一月二十日八十四歳で遷化したしました。遠方の方へのお知らせが遅くなりましたこと、お詫び致します。

ここ半年ほど持病のため体調がすぐれず、肺炎に打ち勝つ体力が残っていなかったように思います。

多くの皆様のおかげで一月二十九日の通夜、三十日の葬儀を行うことができました。弟子として、また娘として深く感謝申し上げます。

二十歳で紫雲寺の住職となり六十三年間、お寺とともに歩んだ生涯でした。その間、本堂の改修、庫裏の改築という大事業を成したのも、檀家さんや地域の方々の大きなお力添えのおかげです。師僧に成り替わりお礼申し上げます。

長い人生の間には様々な困難もあつたことと思いますが、皆様お一人お一人のご縁のお陰で実りの多い一生であつたに違いありません。寺族一同そのご縁に感謝いたしております。

師僧は徐々にお寺の仕事を私たち弟子に任せるようになってからも、この「まんだら通信」は自分の仕事として取り組んでおりました。昨年後半になり月に一度という発行が難しくなりましたが、皆様の温かい励ましの言葉で意欲を持ち続けることができました。忙しい日々にも毎日読書は欠かさず、

「つるで水を汲むようだ。」と記憶力の低下を嘆きながら、付箋を貼っては家のあちこちに本を置き忘れて苦笑する父の姿がまだ家の中にあるような気がします。

二月十五日は涅槃会です。父を偲びつつ昭和五十三年二月にまんだら通信の前身である紫雲寺寺便りの「かがり火」に掲載された「世尊最後の旅」を再掲載させていただきます。

世尊最後の旅

お釈迦さまの最後旅のことは、中央アジアから中国を経て日本に伝わった「大般涅槃経」(だいはつねはんぎょう)や南方のタイやスリランカに伝わっている「マハーパリ・ニツバーナ・スッタナンタ」などにくわしく語られており、お弟子や在家信者を想う世尊のあたたかいお心と、このお経を編集した人々の世尊を慕い敬う真情にあふれた、世界でも稀に見る宗教文学であるといわれます。私には、その雰囲気を感じることができませんけれども、かいつまんで話すと次のようであります。

さて、世尊の活動した範囲はインドの北の方、ガンジス河のほぼ中流域が中心ですが、その最も南に近いラージャグリハ(王舎城)を出発するところからこのお経は始まります。ご一緒するのは世尊のいとこで、いつもおそばに仕えるアーナンダ(阿難)尊者と大ぜいのお弟子たちです。

途中、町や村で大切な教えをいくつか説かれましたが、パークリ村(今のパトナ市)では信者たちに次のようなお話をされました。「行いの悪い者(破戒者)が受ける損失は次のようである。まず、大いなる財産の損失を招く。第二に評判が悪くなる。第三、人の集りの中で心おだやかでない。第四に死の時に思い悩む。そして第五には、死後、地獄で苦しまねばならない。

それにひきかえ、正しく戒律を守る者には五つの功德がある。第一に大いに財産がふえる。第二、評判がよくなる。第三にはどんな集りの中でも自信を持つてふるまうことができる。第

四には死の時、迷うことがない。第五、死した後、天上界に生まれる。」このように夜の更けるまで説法され信者たちをばげまされたのでした。

然し、世尊はこの時すでに病を得ておられました。「アーナンダよ。私は老いおとろえ、すでに八十才になった。ちょうど古い車が修理してやつと動いているように、私もやつとで動いているんだよ。」などというお言葉もあります。

ガンジス河を渡ってヴァイシャリーではまた、象が眺めるように、町を見渡して「アーナンダよ。これは私がこの町を見る最後になるだろう。」ともいつておられます。

世尊について、ここは思い出多い土地でした。全身をめぐらしてゆつくりと見渡すお姿が映画の一コマのように目に見えて、読むたびに目頭が熱くなります。

法を説きながら尚、北をさして進み、生まれ故郷カピラヴァストウにあとわずかというクシナガラ村のサーラ(沙羅)樹の林で入滅の時をむかえます。木々は季節ではないのに満開となり、天上の花や栴檀香(せんだんこう)が降りかかり、天人たちの音楽や歌ごえが湧きあがって、大いなる死(般涅槃・はつねはん)におもむく世尊を供養します。

この夜もお弟子たちに法を説き、次のように結ばれたとあります。

「ではビクたちよ。お前たちに告げよう。あらゆる現象は移ろい行く。怠らず努めるがよい。」と。実に、これが、世尊の最後の言葉であつた、と記されています。

それはイエス・キリストの生誕に先だつこと約五百年、今からほぼ二千五百年前の二月十五日、満月の夜のことでした。ルンビニ園の樹の下で生まれ、ブツダガヤの菩提樹の下で悟りを開き、今またサーラの樹の下に大いなる死をむかえる。大慈悲に生きた偉大な宗教家の生きざまがここにあります。

(資料・渡辺照宏「新釈尊伝」山口益「仏教聖典」ほか)

この後、平成二十五年、父は孫の龍祐と世尊最後の旅を巡ることが出来ました

余滴

▼多くの皆様からのまんだら通信、あそか基金への応援ありがとうございます。引き続きあそか基金を通じてスリランカの子供たちを応援していきたいと思っております。父の葬儀のため、スリランカから駆けつけてくださった、アンギラサ師が来週中にももう一度紫雲寺にきて下さいますので、現状をお聞きたいと思っています。

▼家族の中心だった父を亡くしあれもこれも聞いておけば良かったと日々思います。そんな毎日のなかで、残されたまんだら通信の中に父が思ったことが書き残されていることが救いになります。拙い文章と編集で誠に恐縮ですが、できる限り発行し続けたいと思います。

▼今年の冬の寒さは例年より厳しいようです。まだまだ寒い日が続きますが、皆様お身体に気をつけてお過ごし下さい。

2018/02/11 龍芳



いよいよ新学期も始まりまして、先生方も落ち着かない日々を過ごしていらしやるのではないかと、実は私、心配しているんでございます。

なぜかと言うと、最近のお子さんは昔の子供に比べて、頭がいいですからね。

ある時、先生が子供向けの本を読んで聞かせてましてね、「ひろし君は、その村を去ることになつてしまいました。おじいさんもおばあさんも泣きながら手を振っています。飼っていたヤギもいつせいに鳴き出し、ひろし君とのお別れを告げていました」なんて読んだら、突然、ひとりの子が手を挙げたんです。

「先生、その文章は間違っています。ヤギはいつせいに鳴きません」

「え、どうして？」

「ヤギはメーメーで鳴く」

こういう子は、将来、噺家になつたらいいと思いますが……。

学校といえば、黒板にチョークを思い出しますが、今日はそのチョークにまつわるお話をしたいと思います。

私の知人がある日、チョーク工場を見学に行つたんだそうです。そこで、素晴らしい話をお土産に持ち帰ってきましたので、ご紹介します。

今から五十年前、まだ小さかったチョーク工場にひとりの先生が社長を訪ねてやってきました。その人は、近所の養護学校の先生でした。

「社長、ひとつお願いがあります。今度、うちの養護学校を卒業するふたりの女生徒がいるんです。卒業しても、知的障害がありますから、就職するところありません。でも、私はたとえ一週間でも働くことの素晴らしさを教えてあげたいんです。どうか、一週間だけ雇っていただけないでしょうか」あまりに熱心に頼まれましたから、社長も「じゃあ、一週間だけ」という約束で彼女たちをアルバイトに採用したので

会社は朝八時から始まります。でも、彼女たちは毎日七時には玄関に立つていました。雨の日も傘を差して、工場の門が開くのを待っていたそうです。

社長は、彼女たちでもできるような簡単なラベル貼りの仕事を与えました。

流れ作業のラインに参加させるわけにはいかなかったからです。そんな雑用のような仕事でも、ふたりは一生懸命に働きます。みんなが十時や昼休み、三時の休憩をとっているのに、少しも休もうとしません。

「そんなに働くと疲れるよ。休んでいいんだよ」

他の従業員が声をかけても、聞こえているのか聞こえていないのか、それこそ夢中になつて働くのです。

三日経ち、四日経ち、五日経ち、約束の日が近づいてきました。

その時です。その工場の従業員全員が社長に「この子たちを正社員にしてあげてください」と直談判を始めたのです。驚いた社長が理由を聞くと、「私たちは、彼女たちに働く素晴らしさを教えられた」と言うのです。

つまらない仕事でも、あんなに楽しそうに、一心不乱になつて働いている。

「彼女たちができないところは私たちが全員でカバーしますから、彼女たちを辞めさせないでください」

ふたりの少女が社員の働く意識を、わずかに週間で見事に変えたのです。

社長は、仕事を終えたふたりを呼びました。「ありがとう、君たちのおかげで、みんなにやる気が生まれたんだ。先生との約束は明日までだけど、君たちさえよかつたら、このままずっとここで働いてくれないか。先生には、僕のほうからお願ひする」

こうして、ふたりは正社員になれたのですが、ラインの作業にはむずかしくてなかなか参加せられせん。その時、社長の頭にひらめいたのは、信号機だったそうです。

（この子たちは、この工場まで徒歩でやってくる。ということは、信号を渡れる。

だったら、色彩は識別できる。よし、ラインを色で表せば、工程が分かる！）

社長は、それから工程をすべて色別けし、彼女たちでも分かるようにしたのです。時間は砂時計にしました。休み時間には肩を叩く。そして、社長は社員たちに言いました。

「人間にはどんな人にも可能性がある。それを引き出すのも、また人間の幸福だ。だから、従来の作業方法を彼女たちに教えるのではなく、作業工程を彼女たちの能力に合わせよう。いいかい、みんな、もし、彼女たちが作業を間違えたら、こちらの指示が悪かつたと思うんだよ」

現代では、一定の企業には障害者雇用が義務付けられていますが、なにしろ五十年前も前の話です。この社長と社員の努力には頭が下がります。

もちろん、彼女たちは社員の力を借りながらも、毎日、毎日、それが天職ではないかと思うほど、働いたそうです。

ある日、社長は更衣室に何気なく置かれた彼女たちのノートをのぞきました。

そこには、子供のような字で、「わからないことは、ききます」と書かれ、次のページをめくると、さらに大きな字で「がんばる」「がんばる」といくつも書いてあつたと言います。

知人がこの工場を訪ね、現会長にその話を聞いていたとき、ひとりのおばあさんがお茶を運んできたそうです。会長は、そのおばあさんを差して、言いました。

「この人が、最初にやってきたふたりの女生生のうちのひとりです」

日本理化学工業株式会社。その後も、障害者を採用し続け、いまでは全社員の半数以上が障害者です。工場見学者があとを絶ちません。会長は、大学卒業時、教員になる予定だったけれど、病気がちの父のため、家業の工場を継いだのだそうです。チョークに教育の情熱を注ぎこんだのかもしれないね。

以前掲載された鳳豊師匠の人情小噺からの再掲載です。

日本理化学工業ってどんな会社なのか気になつてホームページを覗いて見ました。

平成二十八年六月の時点で全従業員八一人中六十にんが障がいをもつた方だそうです。

また、障がい者雇用のきっかけは、禪寺のお坊さんから人間の究極の幸せは、一つは愛されること、

二つ目はほめられること、三つ目は人の役に立つこと、四つ目は人に必要とされることの4つです。福祉施設で大事に面倒をみてもらうことが幸せではなく、働いて役に立つ会社こそ人間を幸せにするのです」と教わつたからでした。

とありました。

MOKU出版三遊亭鳳豊さんのお労作です。

今月は最新号が、何故かまだ届いていないため、以前のものを再掲しました。